

# ミニトマト葉かび病に対する殺菌剤の効果

～殺菌剤の特性をよく知って効果的な防除計画を～

## 1. はじめに

県内ミニトマト産地では、葉かび病の発生による収量、品質の低下が問題となっている。長い栽培期間を通して病害の発生を低く抑えるためには、殺菌剤の特性に基づいた防除計画が重要である。そこで、ミニトマト葉かび病に登録のある殺菌剤について、予防効果および感染後の発病抑制効果を調べた。

## 2. 殺菌剤の予防効果の検討

図1の殺菌剤をミニトマト「キャロル7」のポット苗に散布してから、葉かび病菌の孢子懸濁液を噴霧接種するまでの日数を、7～28日まで約1週間間隔で設定したときの発病の違いを調べた。無処理での発病は、2011年は多発生、2012年は小発生条件であった。アフエットフロアブル、ペンコゼブフロアブルは接種21日前の散布でも高い予防効果が認められた。ダコニール1000は接種14日前の散布であれば予防効果は高かった。アミスターオプティフロアブルは接

種28日前の散布でも高い予防効果が認められた。トリフミン水和剤は無処理に比べると効果はあるもののその程度はやや低かった。

## 3. 感染後の発病抑制効果の検討

葉かび病菌の孢子懸濁液をミニトマト「キャロル7」のポット苗に噴霧接種してから、3および7日後に図2の殺菌剤を散布し、その後の発病の違いを調べた。なお、無処理での発病は2.と同様である。感染後の散布でも発病抑制効果が認められたのはアミスターオプティフロアブルとアフエットフロアブルであった。

## 4. おわりに

施設栽培ミニトマトではこれらの薬剤の予防効果と残効期間を考慮した上で予防散布主体の防除計画を立てるとよい。なかでも、アミスターオプティフロアブルは感染後の発病抑制効果が高いので発病初期の治療剤として用いるのが有効であると考えられた。

(環境部 安井洋子)

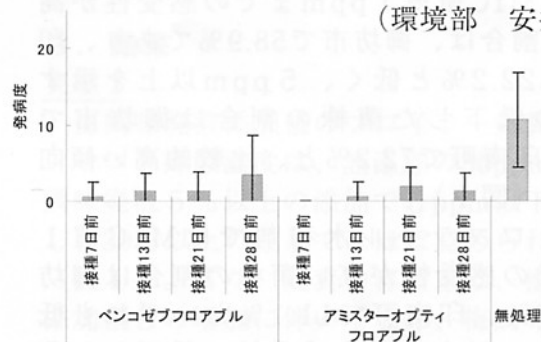
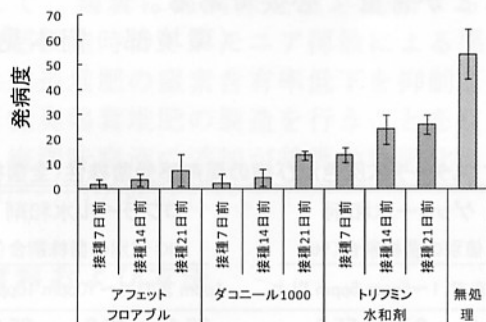


図1. 殺菌剤の予防的散布がミニトマト葉かび病の発病に及ぼす影響 (左: 2011年、右: 2012年)  
注) 縦棒は標準偏差を表す。

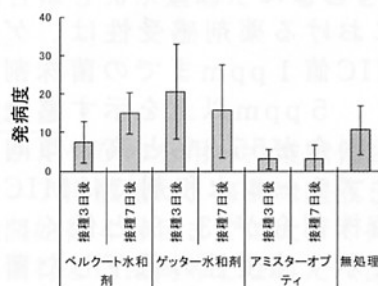
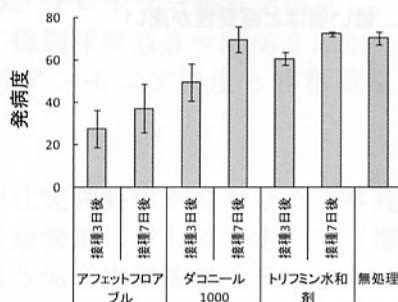


図2. 感染後の殺菌剤の散布がミニトマト葉かび病の発病に及ぼす影響 (左: 2011年、右: 2012年)  
注) 縦棒は標準偏差を表す。